

都城市長 長峯 誠 殿

平成 19 年 1 月 12 日

竹の会 世話人 岩切平

拝啓

歴史と風光の街、都城市におかれましては、政策上の課題も多岐にわたり、繁忙のさ中におられることとお察し申し上げます。

本会は、宮崎県内の建築家、造園家等、20名で構成する自主的な研究サークルです。毎月1回の例会を持ち、隔月には県外からの講師を招き、その活動は12年目に入ります。とかく、建築物の文化的価値の評価にうとい本県において、建築物の持つ文化的、社会的影響力ということに主眼をおき、勉強会を重ねてまいりました。

この度、都城市では、『総合文化ホール MJ』の完成に伴い、都城市民会館の今後の処遇についての検討がなされていると聞き及びます。

ここに、建築、都市を専門とする私たちから、この建物の持つ文化的、社会的役割と、今後の施設運営等の重要性を指摘し、その保存活用の要望書を提出させていただきます。

都城市民会館の学術的、かつ造形上の特殊性については、すでに建築学会でも定説になっており、欧米にも紹介され国際的な評価を受けています。宮崎県においても、それは日南市の日南市文化センター(丹下健三氏設計)と双璧をなすものとして非常に貴重な存在といえます。都城市民会館は、1960年代当時、高度経済成長期にまさに日本の躍動するエネルギーを象徴する建築家の作品として、都城という都市の名を有名にし、また未来への技術革新に対する夢を確かなものにする里程標としての役割を担ったものでした。

7月22日に都城市で行われた市民主催の、保存のためのシンポジウムでも明らかになったことですが、この市民会館が当時の厳しい市財政の中から、きわめて奇跡的な誕生の経過をたどったということ、それはひとえに菊竹清訓という才気あふれる建築家のアイデアと、構造家として日本を代表する松井源吾という独創的技術者との協働の賜物といわなければなりません。その造形のユニークさは、ローコストを踏まえながら、果敢にポジティブな発想を織り込んだ末の技術上の成果であったことが評価の第一義でありましょう。

その後、この建物の美質が皮肉にも予算化の面でメンテナンスに問題が生じてきた経緯も事実です。しかし、建築家の構想したものが中途のままで、継続的なホール使用を余儀なくされてきた経緯もまたシンポジウムでは指摘されました。いわば、建築家の構想が途中で顧みられなくなったという、建築としての悲劇性をも抱え込んで40年という歳月にさらされていたといえるかもしれません。

建築史的に評価の高い建物であることは論を俟たないことですが、爾来、このような話題性を持つ建物が県内に一つとして建設されなかったことも、その重要性を証明するものといえましょう。

しかし、何よりも40年間、市民の文化を育む場として愛され、使用されてきたということがこの建物の価値を不動のものとしていると謂っても過言ではありません。

建築は使われてこそ価値を維持できるものです。市民とともに40年、市民の眼に焼き付いた記憶は、また新しい出発をすることによって、更なる市民の物語を生み続けていく、それは期待に余りあるものがあります。

市民の多様なニーズに応えるためにも、堂々と旧市民会館として、新たなる生き生きとした企画がこの建物に付与され、更に都城市民の歴史的な矜持の一画に位置づけられることを願ってやみません。宮崎にこのような技術の粋を極めた建物があるということだけでも誇りとしなければならないと思われまます。

今からの都市は、常に多様なニーズに応えるための骨格を有していなければならないと思います。特に地方分権のかけ声のもと、厳しい条件下ではありますが、地方自治を少しでも多角的に、豊かに機能させていくためにもこの建物の存在意義の重要性を主張したいと考えます。ぜひ、宮崎県の文化レベルの維持のため、もとより都城市民の文化活動を推進させるために、この都城市民会館の未来志向の活用を保持していただきたいと存じます。

なお、私たちの会<竹の会>は、今年5月に世界でもきわめて珍しい 建築図書館を宮崎市に開設いたしました。宮崎県の建築文化の向上、啓蒙に向けてその内容の充実に日夜努力を重ねているところです。建築は人間を大きく包み込む器。未来を担う子供たちに大人たちが用意する大切な環境です。自然環境の保護と同時に、私たちが築いてきたものへの記憶という人間の一番深い情緒的な感性を育む場として、古い建物をこそ大事に見守っていきたいと思います。

都城市民会館の保存活用問題は、市民だけではなく全国の注目するところです。ぜひ、郷土の心のよりどころとして、また歴史ある都城市の近代遺産という意味でも存続させ、新たな息吹を与えていただきたいと願います。

付属資料 竹の会の活動概要 建築図書館設立趣意書